

市原市西野遺跡

—国道道路改築委託埋蔵文化財調査報告書Ⅱ—

平成18年3月

千葉県県土整備部
財団法人 千葉県教育振興財団

いち はら し にし の い せき 市 原 市 西 野 遺 跡

—国道道路改築委託埋蔵文化財調査報告書Ⅱ—



序 文

財団法人千葉県教育振興財団（財団法人千葉県文化財センターから平成17年9月1日付で名称変更）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その結果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第552集として、千葉県県土整備部の国道道路改築委託事業に伴って実施した市原市西野遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、奈良・平安時代の竪穴住居跡が出土したほか、柱穴群、井戸跡、土坑が検出されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行にあたり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係者の皆様や関係機関、また、発掘から整理までご苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成18年3月

財団法人 千葉県教育振興財団
理事長 佐藤 健太郎

凡　　例

- 1 本書は、千葉県県土整備部による国道道路改築委託（西野遺跡埋蔵文化財調査）に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書は下記の遺跡を収録したものである。

西野遺跡 千葉県市原市糸久300ほか （遺跡コード 219-030）
- 3 発掘調査から報告書刊行に至る業務は、千葉県県土整備部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センター（平成17年9月1日付けで財団法人千葉県教育振興財団と名称変更）が実施した。
- 4 発掘調査および整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、中央調査事務所主席研究員 土屋治雄が担当した。
- 6 発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県県土整備部、市原市教育委員会ほか多くの方の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地図は、下記のとおりである。

第1図 市原市役所発行 1/2,500地形図
第2図 国土地理院発行「姉崎」「海士有木」 1/25,000
- 8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭42年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、全て座標北である。測量値は日本測地系である。
- 10 本書で使用した遺構番号の略号は、以下のとおりである。

SI：堅穴住居跡 SH：柱穴（ピット） SE：井戸状遺構
SK：土坑 SD：溝
- 11 本書で使用した遺構番号は、基本的に調査時の番号を踏襲した。

本文目次

序文

凡例

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1 調査の経緯と経過	1
2 調査の方法	3
第2節 遺跡の位置と環境	4
1 遺跡の位置と環境	4
2 周辺の遺跡	4
第2章 検出された遺構と遺物	6
第1節 概要	6
第2節 遺構と遺物	6
1 堅穴住居跡	6
2 柱穴群	6
3 非戸状遺構	12
4 土坑	12
5 溝状遺構	13
6 グリッド出土遺物	13
第3章 まとめ	15
報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図 調査区及び確認トレーナ	2	第7図 SE-101	12
第2図 遺跡の位置と周辺遺跡	5	第8図 SK-101	12
第3図 遺構配置図	7	第9図 SK-102	12
第4図 SI-101	8	第10図 SD-101	13
第5図 柱穴・土坑群	10	第11図 グリッド出土遺物	13
第6図 柱穴・土坑群断面図	11		

表 目 次

第1表 造構一覧表.....14 第2表 銀貨計測表.....14

図 版 目 次

図版 1	遺跡周辺航空写真	図版 5	SE-101 (南から)
図版 2	調査前近景 1 (南西から)		SK-101 (南から)
	調査前近景 2 (南西から)		SK-101断面 (南から)
	調査前近景 3 (南から)	図版 6	トレンチ (H17①) (南から)
図版 3	トレンチ 1 (北から)		調査区全景 (H17②) (北から)
	トレンチ 1 断面 (南西から)		トレンチ 1 (H17②) (北から)
	トレンチ 2 (南から)	図版 7	トレンチ 1 断面 (H17②) (南西から)
図版 4	トレンチ 4 (東から)		トレンチ 2 (H17②) (東から)
	SI-101 (東から)		出土遺物
	柱穴・土坑群 (北東から)		

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

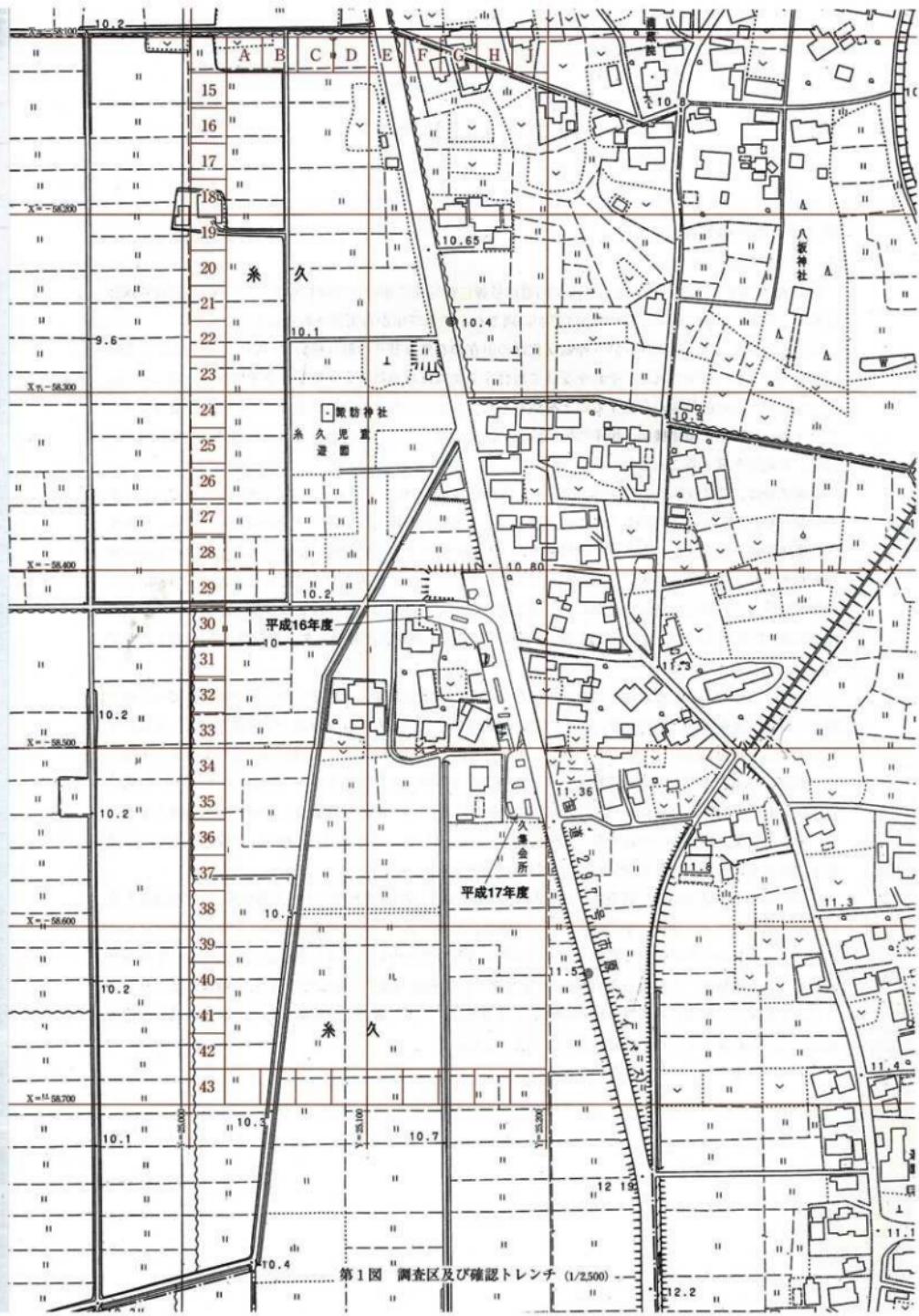
国道297号線市原バイパス改良工事は、国道16号線に接続する市原市玉前を起点とし、現国道297号線と合流する市原市二日市場までの10.7km区間が計画され、昭和57年から実施されることになった。

事業計画に当たり、昭和56年に『埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて』の照会が千葉県教育委員会あてに提出された。それを受けて教育庁文化課は現地踏査を実施し、事業用地の一部に上総国府推定地や土器の散布地が存在することを回答した。さらに千葉県教育委員会では、それらの遺跡に対する取り扱いについて関係機関と慎重な協議を行い、工事の方法等が検討された。その結果、やむを得ず記録保存の処置を講ずることになった。

発掘調査は、昭和59年から昭和60年にかけて、西野遺跡群の北部分である市原市西野字南口192-1ほかを対象とした7,470m²が実施された。この調査では、6世紀代の竪穴住居跡、9世紀後半の井戸跡、9世紀代の溝跡等が検出された。さらに、昭和60年から昭和62年にかけて断続的に養老川の北岸の白山遺跡の調査が行われた。この調査は市原市村上2770ほかに位置し、7,400m²が調査対象とされた。統いて昭和61年から昭和62年にかけて白山遺跡の北西に続く村上遺跡群内の市原市村上2840ほか及び村上2358ほかの2地点、15,000m²が調査された。これらの3遺跡は、昭和63年に「千葉県文化財センター調査報告第161集」として刊行されている。

その後、遺跡の所在しない地区において工事が進められてきたが、平成12年から再び西野遺跡内を南に統く工事が必要となり、平成12年、平成13年と断続的に2次にわたって発掘調査が実施された。平成12年度の調査は、市原市西野字中村425-1の1,206m²を対象とし、128m²の確認調査、387m²の本調査を実施した。調査の結果、古代の掘立柱建物跡、土坑、中世の井戸跡、中・近世の溝などを検出している。平成13年度は、市原市西野字中村439-1ほかの5,876m²を対象とし、568m²の確認調査、1,920m²の本調査を実施した。調査の結果、古代から中世の井戸跡や溝跡などを検出した。これらの2遺跡は、平成16年度に「千葉県文化財センター調査報告第523集」として刊行されている。

今回報告する平成16年度の調査は、市原市糸久300ほかの1,500m²を対象とし、上層262m²の確認調査を実施した。調査の結果、奈良・平安時代の竪穴住居跡、土坑、柱穴、井戸状造構や中・近世の溝などを検出している。トレンチを拡張して調査したため本調査は行っていない。平成17年度は、2回に分けて調査を実施した。1回目は、市原市糸久320の62m²を対象として確認調査を実施したが遺構、遺物は確認されなかった。2回目は、市原市糸久319ほかの392m²を対象とし、55m²の確認調査を実施した。調査の結果、遺構、遺物は検出されなかったため確認調査のみで終了した。



発掘調査及び整理作業に係る各年度の期間、担当者及び作業内容は、下記のとおりである。

(発掘調査)

平成16年度

期間 平成16年7月1日～平成16年8月12日

担当者 南部調査事務所長 高田 博

上席研究員 土屋潤一郎

内容 上層確認調査262m² / 上層本調査0m² 調査面積1,500m²

平成17年度

①期間 平成17年11月1日～平成17年11月4日

担当者 中央調査事務所長 谷 匠

上席研究員 鈴木弘幸

内容 上層確認調査 50m² / 上層本調査 0m² 調査面積 62m²

②期間 平成18年1月5日～平成18年1月16日

担当者 中央調査事務所長職務代理者 及川 淳一

上席研究員 土屋治雄

内容 上層確認調査 55m² / 上層本調査 0m² 調査面積 392m²

(整理作業)

平成17年度

期間 平成18年2月1日～平成18年2月14日

担当者 中央調査事務所長職務代理者 及川 淳一

上席研究員 土屋治雄

内容 水洗・注記～報告書刊行

2 調査の方法（第1図）

調査地の地区割りは、公共座標（国土方眼座標第Ⅳ座標系）のX = -57,820, Y = 25,020を基点として、東西方向へ20mごとに、東へアルファベットでA～J、同様に南北方向へ北から算用数字の01～43まで割り付け、01A・43Jのように算用数字とアルファベットを組み合わせて大グリッド名とした。大グリッド内をさらに2m四方の小区画に区切り、100の小グリッドに分けている。大グリッドの北西端を00とし、東へ1の位をおくって09まで、南へ10の位をおくって90までとし、南東端が99となるようにした。具体的な表示は12E-86のようになる。遺構の測量図の作成や遺物の記録は、すべてこの座標値に基づいている。

発掘調査は、調査区の状況に合わせ調査対象面積の10%の確認トレンチを掘り、遺構確認を行った。その結果、平成16年度の調査では竪穴住居跡、柱穴が確認された。遺構が確認された2か所について周囲を拡張して調査を行った。平成17年度の調査は確認調査のみで終了した。

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と環境

市原市西野遺跡は、西野・権現堂・糸久・新生の各地区にまたがる東西0.6km、南北1.7kmにおよぶ長大な範囲が想定される遺跡である。清澄山系の東麓に源を持ち、東京湾へ注ぐ養老川の左岸に位置し、標高7m～11mの自然堤防上に立地している。この養老川は、遺跡の所在する付近でそれまで北行していた流れを、急激に西方へ変える。周囲の微高地の分布などを俯瞰すると、川が幾度となく氾濫し、その都度流路を変えていたことが窺える。平成16・17年度の発掘地区では、西野遺跡の南西隅縁辺部の標高9m～11mの地区が調査対象であった。

遺跡は自然堤防上に立地しているが、調査地点が微高地の縁辺であるため、一部が水田にかかる状況で、低湿地遺跡の様相を呈していた。そのため、わずかな掘削でも涌水が見られる状況であった。

2 周辺の遺跡（第2図）

西野遺跡の所在する微高地は、養老川に沿ってさらに西へ延びるが、その微高地上には、西野に隣接する小折地区・十五沢地区を中心に十五沢遺跡群があり、柳原地区・今富地区を中心とする坊ヶ谷遺跡群へと続く。小折地区は、地名の読み「こおり」が「郡」の変化と考えられ、郡衙の名残として「大日本地名辞典」に紹介され、海上郡衙所在地に比定されている所である。また、今富地区には、上総国分僧寺に先行する時期の瓦が出土した今富廃寺跡が所在する。この寺は、小折の西約500mに位置し、海上郡衙の郡名寺院と考えられている。この遺跡は、昭和56年に発掘調査が実施され、瓦散布地の周辺に調査トレンチが入れられた。調査の結果、軒丸瓦3種と軒平瓦1種などが確認されている。軒丸瓦については、三重圓文綠單弁八葉蓮華文軒丸瓦と二重圓文綠單弁八葉蓮華文軒丸瓦の2種が、7世紀後半に建立された印旛郡栄町龍角寺の系譜を引くもので、もう1種が、市原市武士廃寺のものと同范の有芯四重圓文軒丸瓦である。軒平瓦は、均整草文軒平瓦で、上総国分僧寺跡出土瓦と同系のものである。これらの瓦からは、今富廃寺が、7世紀末か8世紀初頭に建立されたこと。さらに、8世紀半ばに整備・補修された可能性のあることがうかがえる¹⁾。ここからさらに南西へ700mほどの低段丘上には、4世紀前半の築造とされる全長約110mの前方後円墳である今富塚山古墳が所在する。律令制以前のこの地域は、上海上國造の支配領域とされ、今富から姪崎古墳群を含めたこの一帯が、その本拠地であったと考えられている。今富塚山古墳のある段丘面の東には宮原地区に宮原御所、神代地区に神代城跡、分目地区に分目要害城跡といった中世の城跡等が所在する。西野遺跡と養老川を挟んで対岸には、上総国府推定地のひとつとされる村上遺跡群があり、その東側台地上には、上総国分僧寺、上総国分尼寺、坊作遺跡等が所在する。特に坊作遺跡は、上総国分尼寺の造営に関わりの深い集落と考えられており、この遺跡から出土した「海上厨」の墨書き土器は、海上郡が尼寺の造営と何らかの繋がりをもっていたことを示している²⁾。

注1 福間元他 1982「今富地区遺跡発掘調査報告」市原市今富地区遺跡調査会

2 小出紳夫他 2002「坊作遺跡」「上総国分寺台遺跡調査報告VI」市原市教育委員会



第2章 検出された遺構と遺物

第1節 概要（第3図）

国道297バイパス改築工事は、既存の道路の幅員を広げる拡幅工事であるため発掘調査は現道に沿った南北に長い調査区であった。調査は平成16年度と17年度に行われたが、遺構が検出されたのは平成16年度のみであった。検出された遺構は、竪穴住居跡1軒、柱穴17基、井戸状遺構1基、土坑2基、溝状遺構1条である。以下、平成16年度調査により検出された遺構・遺物について記す。

第2節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

SI-101（第4図、図版4）

検出されたグリッドは32H-24で、平面形は正方形と思われ、南北4.82m、残存東西4.40m、確認面からの深さは0.10mである。西側が調査区外となるため完掘されていない。硬化面は確認されなかった。柱穴が3基検出されており、P1は長径0.24m、深さ0.24m、P2は長径0.20m、深さ0.36m、P3は長径0.18m、深さ0.22mである。柱穴1基は、調査区外となるため検出されていない。遺物は少なく、土師器片など14点（38.6g）が住居北西側から検出されている。1、2は土師器の杯である。

2 柱穴群（第5、6図、図版4）

柱穴は全部で29基検出された。平安時代に帰属するものが17基である。他の10基は近世以降のものである。集中して検出されているが掘立柱建物跡を構成するものはなかった。

SH-101

検出されたグリッドは34H-07で、平面形は円形であり、上端部の長軸0.37m、短軸0.35m、確認面からの深さは0.48mである。遺物は出土していない。

SH-105

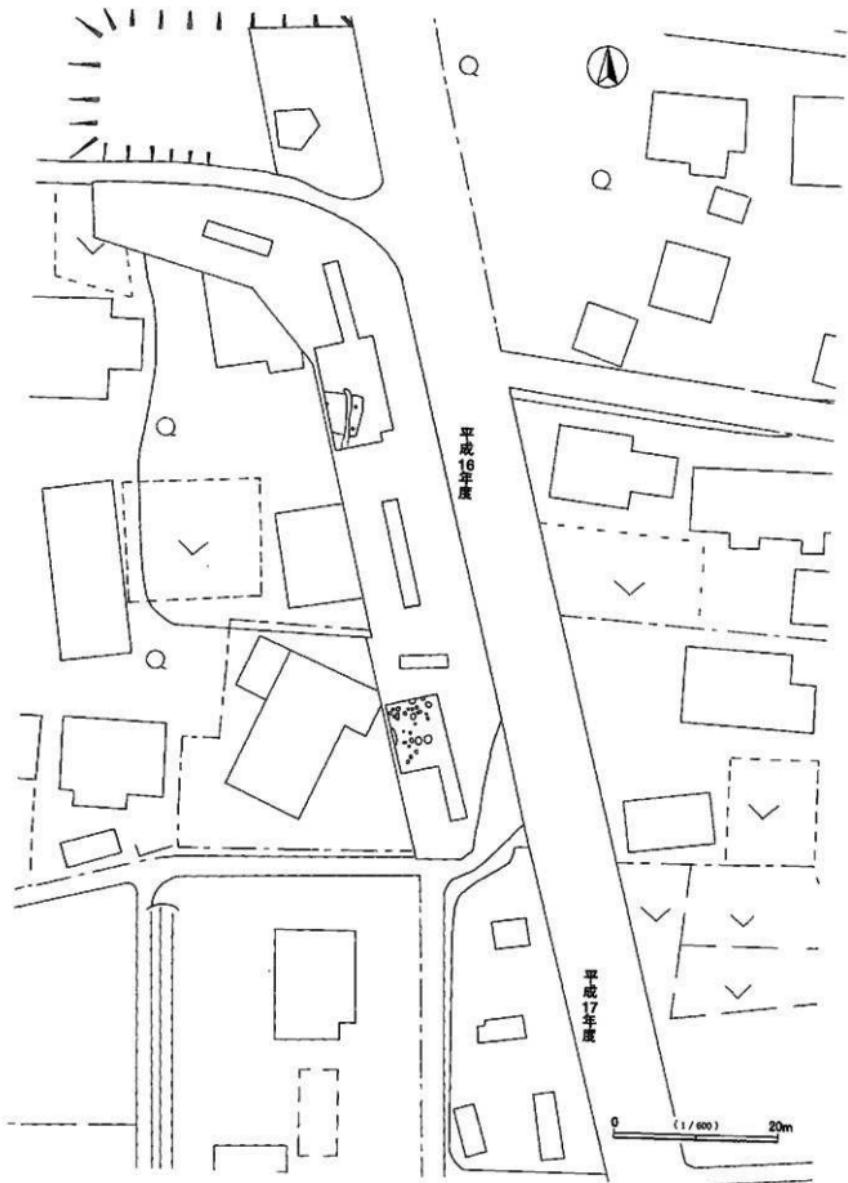
検出されたグリッドは34H-07で、平面形は梢円形であり、上端部の長軸0.46m、短軸0.37m、確認面からの深さは0.46mである。遺物は、土師器片1点（4.0g）が検出された。

SH-106

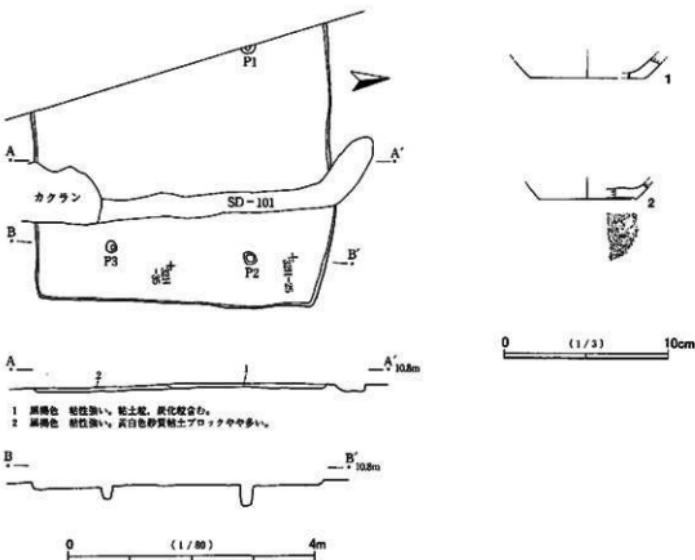
検出されたグリッドは34H-07で、平面形は梢円形であり、上端部の長軸0.60m、短軸0.42m、確認面からの深さは0.43mである。遺物は、少量出土したが図示できるものはなかった。

SH-107

検出されたグリッドは34H-08で、平面形は梢円形であり、上端部の長軸0.52m、短軸0.44m、確認面からの深さは0.52mである。遺物は出土していない。



第3図 遺構配置図



第4図 SI-101

SH-108

検出されたグリッドは34H-18で、平面形は円形であり、上端部の長軸0.64m、短軸0.60m、確認面からの深さは0.49mである。遺物は出土していない。

SH-110

検出されたグリッドは34H-08で、平面形は梢円形であり、上端部の長軸0.76m、短軸0.66m、確認面からの深さは0.56mである。遺物は出土していない。

SH-111

検出されたグリッドは34H-09で、平面形は円形状で、上端部の長軸0.45m、短軸0.40m、確認面からの深さは0.56mである。遺物は出土していない。

SH-112

検出されたグリッドは34H-08で、平面形は梢円形で、上端部の長軸0.55m、短軸0.30m、確認面からの深さは0.36mである。遺物は出土していない。

SH-113

検出されたグリッドは34H-08で、平面形は円形状で、上端部の長軸0.38m、短軸0.29m、確認面からの深さは0.56mである。遺物は出土していない。

SH-114

検出されたグリッドは34H-19で、平面形は円形で、上端部の長軸0.44m、短軸0.32m、確認面からの深さは0.46mである。遺物は出土していない。

SH-115

検出されたグリッドは34H-18で、平面形は円形で、上端部の長軸0.42m、短軸0.38m、確認面からの深さは0.79mである。遺物は出土していない。

SH-116

検出されたグリッドは34H-28で、平面形は不整円形で、上端部の長軸0.44m、短軸0.39m、確認面からの深さは0.68mである。遺物は出土していない。

SH-117

検出されたグリッドは34H-28で、平面形は橢円形で、上端部の長軸0.48m、短軸0.39m、確認面からの深さは0.60mである。遺物は出土していない。

SH-118

検出されたグリッドは34H-28で、平面形は円形状で、上端部の長軸0.47m、短軸0.45m、確認面からの深さは0.57mである。遺物は出土していない。

SH-119

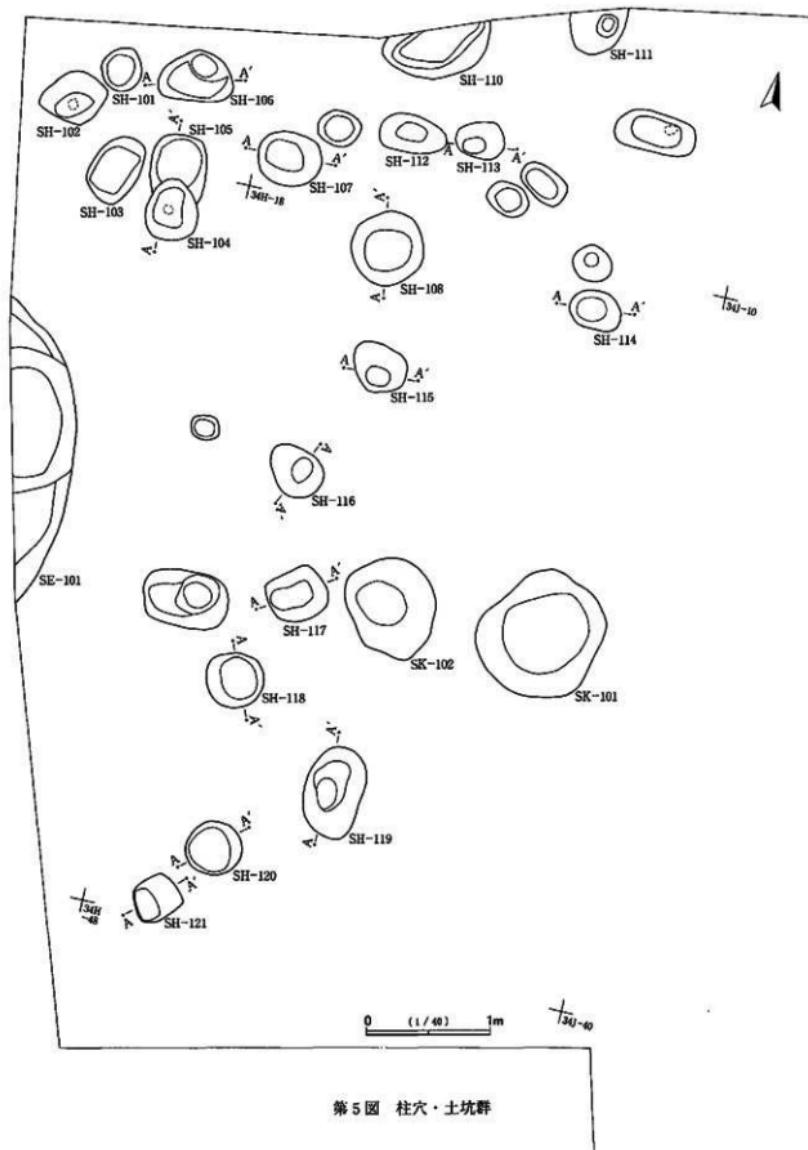
検出されたグリッドは34H-38で、平面形は橢円形で、上端部の長軸0.74m、短軸0.48m、確認面からの深さは0.56mである。遺物は出土していない。

SH-120

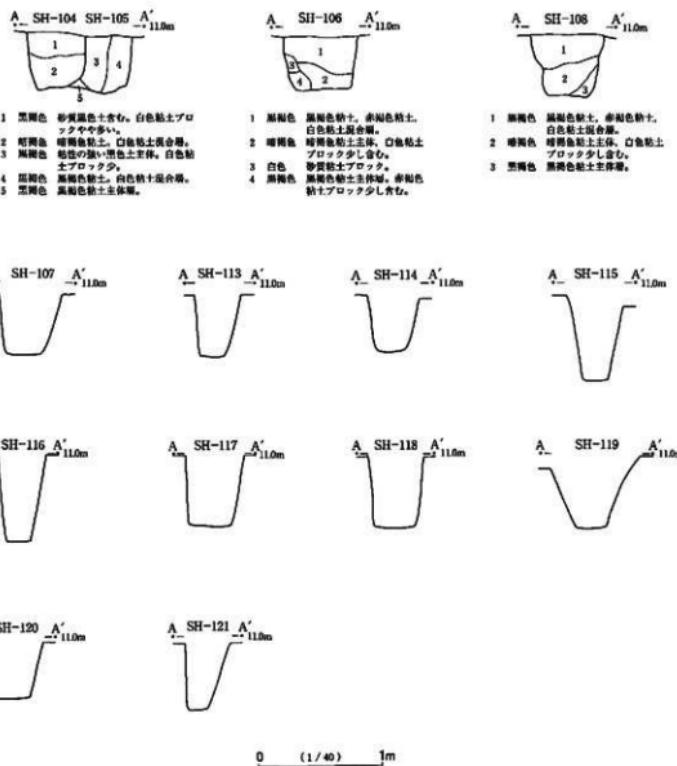
検出されたグリッドは34H-38で、平面形は円形で、上端部の長軸0.47m、短軸0.44m、確認面からの深さは0.47mである。遺物は出土していない。

SH-121

検出されたグリッドは34H-38で、平面形は橢円形で、上端部の長軸0.37m、短軸0.33m、確認面からの深さは0.55mである。遺物は出土していない。



第5図 柱穴・土坑群



第6図 柱穴・土坑群断面図

3 井戸状遺構

SE-101 (第7図, 図版5)

検出されたグリッドは34H-17で, 1/2以上が調査区域外に延びているが, 平面形は円形状と推定され, 上端部の長軸2.51m, 残存する短軸0.52m, 確認面からの深さは0.77mである。遺物は出土していない。

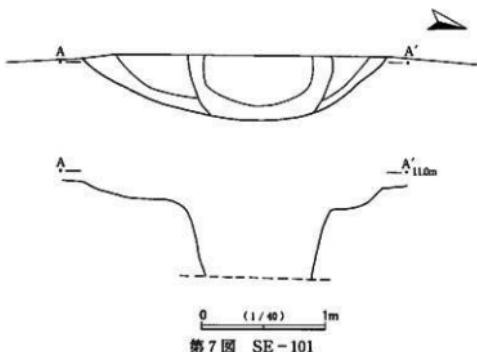
4 土坑

SK-101 (第8図, 図版5)

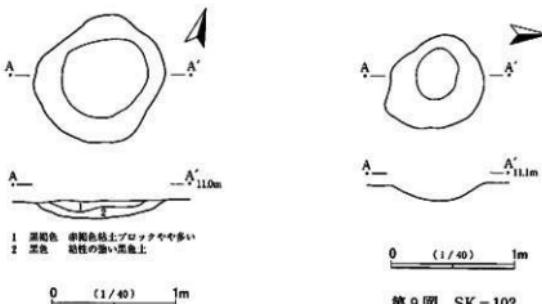
検出されたグリッドは34H-29で, 平面形は円形状で, 上端部の長軸1.06m, 短軸0.98m, 確認面からの深さは0.18mである。遺物は出土していない。

SK-102 (第9図)

検出されたグリッドは34H-28で, 平面形は円形状で, 上端部の長軸0.76m, 短軸0.75m, 確認面からの深さは0.17mである。遺物は出土していない。



第7図 SE-101



第8図 SK-101

第9図 SK-102

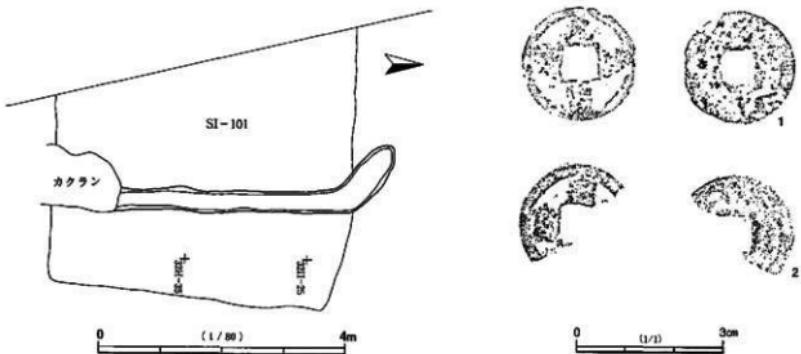
5 溝状遺構

SD-101 (第10図)

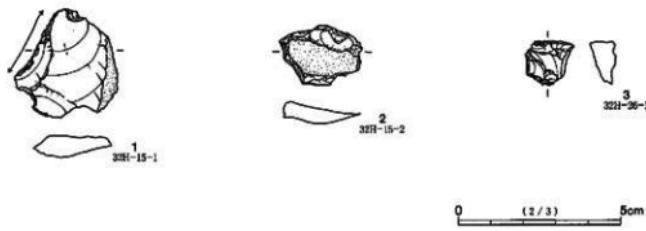
検出されたグリッドは34H-14で、長さ4.90m、幅0.53m、確認面からの深さは0.12mである。遺物1は元祐通寶、2は皇宋通寶である。いずれも北宋錢である。

6 グリッド出土遺物 (第11図、図版7)

32H-15および32H-26グリッドから出土した石器である。1、2は剥片である。3は火打石と思われる。楔形石器の可能性もある。石材は瑪瑙・玉髓である。



第10図 SD-101



第11図 グリッド出土遺物

第1表 遺構一覧表

遺構	種類	検出グリッド	時代	形状	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)
SI-101	堅穴住居跡	32H-24	奈良・平安	正方形	0.82	0.40	0.10
SH-101	柱穴	34H-07	奈良・平安	円形	0.37	0.35	0.46
SH-105	柱穴	34H-07	奈良・平安	椭円形	0.46	0.37	0.46
SH-106	柱穴	34H-07	奈良・平安	椭円形	0.60	0.42	0.43
SH-107	柱穴	34H-08	奈良・平安	椭円形	0.52	0.44	0.52
SH-108	柱穴	34H-18	奈良・平安	円形	0.64	0.60	0.49
SH-110	柱穴	34H-08	奈良・平安	椭円形	0.76	0.66	0.56
SH-111	柱穴	34H-09	奈良・平安	円形状	0.45	0.40	0.56
SH-112	柱穴	34H-08	奈良・平安	椭円形	0.55	0.30	0.36
SH-113	柱穴	34H-08	奈良・平安	円形状	0.38	0.29	0.56
SH-114	柱穴	34H-19	奈良・平安	円形	0.44	0.32	0.46
SH-115	柱穴	34H-18	奈良・平安	円形	0.42	0.38	0.79
SH-116	柱穴	34H-28	奈良・平安	不整円形	0.44	0.39	0.68
SH-117	柱穴	34H-28	奈良・平安	椭円形	0.48	0.39	0.60
SH-118	柱穴	34H-28	奈良・平安	円形状	0.47	0.45	0.57
SH-119	柱穴	34H-38	奈良・平安	椭円形	0.74	0.48	0.56
SH-120	柱穴	34H-38	奈良・平安	円形	0.47	0.44	0.47
SH-121	柱穴	34H-38	奈良・平安	椭円形	0.37	0.33	0.55
SE-101	井戸	34H-17	奈良・平安	円形	2.51	0.52	0.77
SK-101	土坑	34H-29	奈良・平安	円形状	1.06	0.98	0.18
SK-102	土坑	34H-28	奈良・平安	円形状	0.76	0.75	0.17
SD-101	構	32H-14	中・近世		4.90	0.53	0.12

近世の柱穴は掲載していない

第2表 銭貨計測表

	出土地点	銭貨名	初鑄年	重量 (g)	外縁厚 (mm)	文字面厚 (mm)	外縁外径(mm)	外縁内径(mm)	内部外径(mm)	内部内径(mm)
1	SD-101	元祐通寶	1086	1.54	0.98	0.85	裏23.00	裏23.00	裏20.00	裏18.50
2	SD-101	皇宋通寶	1038	1.09	1.05	1.00	裏25.00	裏24.50	裏20.00	裏9.00

第3章 まとめ

西野遺跡は、東西約0.6km、南北約1.7kmの規模を持ち、遺跡およびその周辺は、海上郡衙推定地を含む遺跡群として知られ、昭和59年（1984）に国道297号市原バイパス建設事業に伴う発掘調査が行われ、以来、千葉県教育委員会による官衙関連遺跡確認調査や、今富地区から西野地区に及ぶ大規模な県営ほ場整備事業などにより、幾度かの調査が実施されている。

今回報告する平成16・17年度の調査区は、西野遺跡の南端の微高地上およびその縁辺部にあたる。平成16年度の調査で奈良・平安時代の竪穴住居跡1軒、柱穴17基、井戸状造構1基、土坑2基が検出された。微高地上に営まれた集落の一部が検出されたものと思われる。

検出された住居跡は、集落域の西端に営まれた可能性が高く、調査地東側に集落が広がっている可能性があり、今後の調査において集落が検出される可能性がある。周囲には、現在も糸久集落が営まれている。糸久集落は鎌倉期～南北朝期から記録に表れる村であり、それ以前の変遷が発掘調査において明らかとなつた意義は大きく、糸久地区は、糸つくりあるいは織物の職人集団の集落であった可能性も考えられる¹⁾。

平成17年度の調査では、遺構、遺物とも検出されていない。調査地が微高地の南側の水田区域にあたつていたものと思われる。

奈良・平安時代に比定される柱穴は、17基検出されている。分布状況は、調査区北側に集中する傾向は見られるものの全体から検出されている。柱穴の規模は、長軸は最小0.37m～最大0.76m、短軸は最小0.29m～最大0.66m、深さは0.43m～0.79mである。各柱穴とも掘り込みが深い。土層断面には柱痕跡が見られないことから使用されなくなつてから抜き取りが行われた可能性がある。調査区内の柱穴群には掘立柱建物跡を構成するものは検出されなかった。したがって検出された柱穴群がどのような目的に使用されたのかは不明と言わざるを得ない。

兩年度とも都衙に関連する遺構は検出されなかつたが、本地域が、少なくとも奈良・平安時代までさかのぼることが明らかとなった意義は大きい。

1) 白井久美子氏の御教示による

写 真 図 版





調査前近景 1 (南西から)



調査前近景 2 (南西から)



調査前近景 3 (南から)



トレンチ 1 (北から)



トレンチ 1 断面 (南西から)



トレンチ 2 (南から)



トレンチ 4 (東から)



SI-101 (東から)

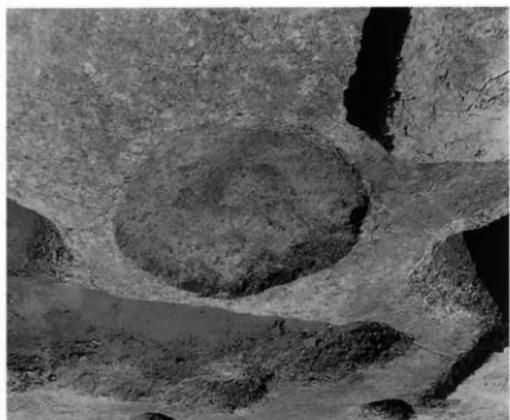


柱穴・土坑群 (北東から)

SK-101断面(南东5)



SK-101(南东5)



SE-101(南东5)





トレンチ (H17①) (南から)



調査区全景 (H17②) (北から)



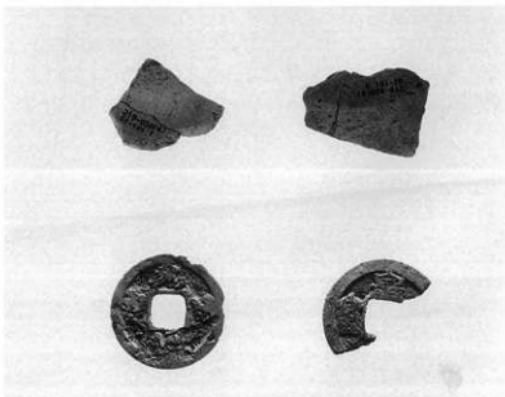
トレンチ 1 (H17②) (北から)



トレンチ 1 断面 (H17②) (南西から)



トレンチ 2 (H17②) (東から)



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いちはらしにしのいせき
書名	市原市西野遺跡
副書名	国道道路改築委託埋蔵文化財調査報告書
卷次	2
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第552集
編著者名	土屋治雄
編集機関	財団法人 千葉県教育振興財団
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地 2 Tel.043-422-8811
発行年月日	西暦 2006年3月24日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
西野遺跡	千葉県市原市糸久 300ほか	12219	030	35度 28分 32秒	140度 6分 26秒	20040701～ 20040812	1,500m ²	国道297号 バイパス改 築に伴う発 掘調査
						20051101～ 20051104	62m ²	
						20060105～ 20060116	392m ²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西野遺跡	集落跡	旧石器時代 奈良・平安時代 中・近世	竪穴住居跡1軒 土坑2基、ピット17基、 井戸状遺構1基 溝状遺構1条	石器 土師器、須恵器 銭貨、陶器、火打石	微高地に営まれた集落の一部が検出された。

千葉県教育振興財団調査報告第552集

市原市西野遺跡

—国道道路改築委託埋蔵文化財調査報告書Ⅱ—

平成18年3月24日発行

編 集 財団法人 千葉県教育振興財団

発 行 千葉県県土整備部
千葉市中央区市場町1-1

財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地2

印 刷 株式会社 正文社
千葉市中央区都町1-10-6